

篠原 徹

自然を歩く ④

【京都北山と納豆】

俳諧や俳句が食生活や身の回りの自然を素材に詠うことが多いので、最近それが歴史的な資料になることや博物誌的な資料になることを主張している。「納豆きる音しばしまて鉢叩」は芭蕉が冬の京で作った句である。鉢叩の音が俳諧の素材であったのであろうが、納豆を切る音がうるさかったお陰で思わぬ歴史的資料を残した。そのときは納豆汁を食べようとしたのであろう。今では関西の人は納豆を食べないといわれるが、この句から類推すると元禄のころつまり17世紀の終わりごろ京では明らかに納豆を食べていたことは間違いない。大阪や京都の友人たちの多くが、納豆のあのネバネバはイヤだねといって食べないと言うと、いつもこの句を引き合いに出して、でもご先祖たちは結構食べていたんじゃないかと皮肉をいうことにしている。最近歩いて知っただけれど京都の北山の一角を占める京北地域は実は納豆の産地であって、納豆もちという特異な食べ物もある。また京丹波町では藁包に入った素朴な納豆を作っている。芭蕉が去来たちと食べた納豆はこれにちがいないと思った。